

VI. 組織による FD 活動報告（学科及びセンター）

A. 人間言語学科 FD 活動報告

1. 「英語の表現」における FD 活動

人間言語学科 2 年生の必修科目「英語の表現」は前期・後期を通して週 2 回開講した。2 クラス（学籍番号で分ける）を 2 名ずつの教員で運営した。今回、学生一人ひとりのポートフォリオ（※）作成を念頭に置いた授業展開を試みた。

※ポートフォリオ

もともと書類入れやファイルを意味するポートフォリオ (portfolio) を学習に用いたものである。学習者は「ワークシート」で資料や課題の収集を行い、学習の後には必ず「振り返り」の時間を設け、学習の意味や自己の学習成果を確認する作業を行う。資料や課題は、ポートフォリオに蓄積していく。ポートフォリオは、学習者は学習ツールとして、教員は評価ツールとして使用する。

2. 授業について

授業形態：演習

対象学年：人間言語学科 2 年次生

担当：上利学、三熊祥文、ティモシー・ビュートウ、小西弘信

開講時期：前期・後期（火・金）

3. シラバス

a. 授業の目標・概要

授業では、英語で様々なタスクを行うスキルを身につける。英語の知識を増やすだけでなく、得た知識を実際に使用する力も身につける。

b. 授業の計画（前期分のみ掲示）

- 1) Orientation
- 2) Self-introduction
- 3) Self-introduction
- 4) Self-introduction
- 5) Paragraph Writing
- 6) Paragraph Writing
- 7) Paragraph Writing
- 8) Paragraph Writing
- 9) Informal Speech
- 10) Informal Speech
- 11) Informal Speech
- 12) Story
- 13) Story
- 14) Story
- 15) Story

学生は 2 回～15 回までに 4 単元を学習する

4. 授業の現状

教員は、前期・後期の計画に沿って4単元が始まる前に集まり、教材や運営方法を考え検討した。単元が終了したら、その都度振り返りをし、次単元につないでいった。また、学生の授業態度や理解度なども検討した。週2回の授業（火曜日・金曜日）で、担当教員が入れ替わった。学生一人ひとりのポートフォリオを用意し、毎回の授業開始時に学習目標を立てさせ、終了後に自身の学習を振り返らせた。それによって、各回の授業内容が連続性をもったものとなり、学生はその時どきの授業内容や、授業を通してどれだけの成果を得たのかを把握することができた。ポートフォリオは各期に2回提出させ、学生の進捗をチェックした。

5. 参加教員の振り返り

一人ひとりのポートフォリオに基づく授業は初めてだったが、このツールを通して教員は、学生と授業外のコミュニケーションを取ることができ、学生の理解度の確認や授業への関心を促進するための良いきっかけになることが分かった。少人数のクラスにはかなり有効であると思う。しかし、約10人以上のクラスでは、全ての学生に対し、課題の添削やコメント、さらにはポートフォリオの確認にいたるまで、公平かつ丁寧に時間を取ることが比較的困難であることが分かった（小西弘信）。

今回4人で授業内容の検討や学生の反応を話し合ったことは自分にとっても非常に新鮮だった。いろいろな案も出て授業内容・運営の方法も深化したと思う。同じクラスの学生が教員の違いに対応して、関わり方を変化させていることも知り、学生を多面的に知ることもできた。ポートフォリオは、毎回の内容を明記するので授業を継続して牽引していく方法としてとても効果的なものだと実感した。（上利学）

今回教授ツール及び評価対象としてのポートフォリオを他の教員に提案したのだが、担当教員内においても良い評価を頂いたと思う。また、学生にも好評であった。このシステムは、中学校や高校ではかなり行われているもので、教授ツールとしては学生の作品制作（知識運用）を促す仕掛けとして機能し、評価対象としても、学生一人ひとり異なる取り組み方を吸収できたと思う。教員と学生とのコミュニケーションのツールにもなっているようだ。このシステムをさらに深化させて複数の教員で運営する他の授業にも活かせたらと思う。（三熊祥文）

今回他の教員に自分の授業方法やアイデアを開示し、いくつか共有できた。そのことで、自分の授業も客観的な評価をいただき、大いに参考になった。一人よりも複数で考えていくことがかなり有益であることを実感した。ポートフォリオはアメリカでは良く行われているが、日本ではあまり周知されていないのは驚きだった。これから他の教員の授業を参観するなどして、ポートフォリオで顕在化した利点をより組織化していきたいと思う。（ティモシー・ビュートウ）

6. 学科長所感

今回4名の英語教員が実験的にポートフォリオを導入しての授業を試みた。教員も学生もツールとして慣れるまでに大変だったろうが、参加教員からのコメントを確認して、一応の

成果があったことが分かり良かったと思う。今後も学生の学習成果が上がる様々なアイデアを学科やグループで共有しあうと良いのではないかと感じ、また、その一例としてのポートフォリオの可能性を実感した。

(報告者：小西弘信)

B. 初等教育学科 FD 活動報告

1. 「FD に関する研究学科会」の取り組みについて

平成 20 年 7 月 22 日（火）に、標記の取り組みを行った。主幹は、岡と森であった。以下、その概要を示した後、学科長としての総評を記すことにしたい。

2. 研究授業について

指導：倉田侃司先生

授業：学級経営の研究・3 年

会場：中講義室

時間：4 コマ目

3. 研究協議（研究学科会）について

講師：倉田侃司先生

司会：植田ひとみ

会場：教職資料室

時間：5 コマ目

a. 趣旨説明 … 岡利道

平成 19 年度集中学科会（H20/2/28～29）では、FD に関する次年度の課題として、次の 4 点が挙げられた。

- 1) 授業開始時刻の厳守、90 分の授業時間の確保。
- 2) 授業内容の吟味・改善の検討も（授業内容の質の改善）。
- 3) お互いの実践に謙虚に学ぶ姿勢を（授業の交流を図ることも一つの方法）。
- 4) 学科独自の FD をどのように実践し、同時に、個人のレベルアップをどのように図っていくか。

特に、③④を受け、さらに、当該年度の BMS 目標としても、「育心育人」教育の推進に関わって「学習成果を保証するための FD 活動の推進」があることから、学科を挙げて FD 研究に取り組むことにした。以下はその記録である。

この度、倉田先生のご授業を久々に拝見でき、あわせて、ご指導を得る機会に恵まれた。先生のご授業は、前期の大詰めに差し掛かったところで、「学級経営の評価・総括」がテー

マとなっている。このような場面のご授業を拝見するチャンスはめったにない。みなさんでしっかりと学び合いたい。そして、倉田先生から、沢山の示唆とやる気を得たいと思う。

b. 授業研究 … 司会：植田ひとみ

1) 倉田先生のご講話から

先生には、わざわざ「熱帯夜の3時間」(レジュメ)を作成の上、ご持参賜った。まずはそのレジュメをもとに、講話をしていただいた。

ここでは、本日の授業からは離れて、倉田先生がFDやSDに関してお考えになっていることを話された。要旨は、以下のとおりである。

「学生さま」の時代へ。大学はサービス業なり、か？ 色々な要求をしてくる学生がいる。本学学生は、反応があり、話が通じるので、まだいい方だ。

大学教育の受難は続く。かつての勤務校でも授業アンケートをしていたが、その実態は。アンケートの時だけ、関係ない学生が入ってくることがあった！ 攪乱するのである。成績がよい教員には報奨金が出る。全体が変な雰囲気になる。授業アンケートの後遺症もある。報奨金は、2年間でやめになった。

悪徳コンサルタントの横行もある。地方大学で、弱いトップのところが多い。これで、内部が分裂する。真のコンサルタントは、皆さんのような常勤の教職員である。

事態を打開するために、金沢工業大学をヒントにしたい。ピンチをチャンスにするのである。金沢工業大学は、実に13年かけた。学生に近づいていくのである。入れた以上は、育てて出す(進路の保証)。教員は、98パーセントが専任。授業料は確かに高い。しかし、徹底して学生に力をつけるのである。

1年生に聞いたところ、「これは大学じゃない」と言ったそうである。忙しすぎるのである。一方、4年生は満足して卒業していく。その秘密は、学生の居場所(学習環境)があることである。ものづくりにも力を入れている。そこでは、上級生が下級生に指導する。こういう関係を大事にしている。ある教職員が言っていた。「学生に奉仕しようと思ったら、むちゃくちゃ忙しい。」と。

2) 質疑・応答から

まずは、「熱帯夜の3時間」(レジュメ)の内容について質疑・応答が交わされた。特に、FDに関わることとしては、倉田先生が、「学生をどこまで支援したらいいかは難しいが、教員として“人に対しては優しく、仕事に対しては(力つけることについては)厳しく”でいくべきある、とおっしゃったことが印象深い。サービス業的に、優しいだけではなく、時には毅然とした態度で、しっかりと力がつくように教え導くことを大切にすべきだと強調されたことは、肝に銘じなければならないだろう。

次に、本日の授業についても、やり取りがなされた。倉田先生からは、幼児教育コース生にも興味を持たせるように、小学校の事例であっても「応用する」のを大切にせよと常々伝えてきた、と話されたことが特筆に価するだろう。受講生の所属にも目配りし、興味・関心・意欲にも配慮がなされているのである。授業の途中で詩の朗読やBGMを取り入れ、変化をつけていかれたことも参考にしたい。授業の中では、集団で考える場面、必ず一

箇所作るようにしておられる。対話させる箇所についても同様である。ポイントを押さえ、メリハリをつけておられる。板書については、「私の板書は遅いが、しっかりとする。番号を振って。」と、基本をご教示くださった。

4. 学科長所感

ご講話からは、徹底して学生に力をつけること、そのために教員が「育てる」ための努力を惜しまないこと（気を使うこと・体を使うこと（汗をかくこと）・頭を使うこと）、学生同士の縦と横の関係を支援すること、学生の居場所（学習環境）を保障すること、などが遂行されるよう私たちが努力を怠ってはならないことが示唆された。たいへんなことではあるが、これらの努力はいずれも初教のカラーに合った内容のものであり、実現は可能だと確信する。倉田先生も私たちにエールをおくるご意図があったのだと思う。FDが推進されるためのこうした基盤づくりを見失わず、新たな一步を踏み出したい。

質疑・応答から、やはり倉田先生は今なお研究面で手を抜いておられないご様子が窺えた。私たちも負けずに、FDに関する最新の知見に学んでいきたい。学科の伝統・風土を大事に守りながら、個人として、チームとして、この度のような研究学科会を今後も継続していきたいと強く感じた。

（報告者：岡 利道）

C. 人間福祉学科 FD 活動報告

1. 学びのマップ作り

人間福祉学科では、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士…など、4年間で多くの資格を取得するためのカリキュラムを組んでいる。さらに近年、これら資格取得科目の内容の見直しが図られ、再申請や担当者の調整等について、学科も非常に苦慮したところである。結果、国家試験に関する科目についても非常勤講師の力に多くを頼っている部分があり、学科設立当初からの課題であったことも事実である。以上のような状況を受け、学科では平成19年度より新カリキュラムも見据えた、教員間さらには担当授業間の相互理解を推進してきた。その成果が「人間福祉学科 学びのマップ」である。このマップでは、開講科目を「分野の広がり」と「学びのプロセス」を軸にマッピングし、ビジュアル面の工夫も加えわかりやすくしたものである。

マップの作成段階において、学科教員は幾度も話し合いを重ねた（そのうち何度かは、ワークショップ形式で行われた）。この話し合いは、普段の授業の進め方に関する意見交換の場であり、また、担当者が国家試験にかかる知識と授業で伝えたい内容とのギャップをどのように埋めるかについて日々悩んでいることなどを共有する場ともなった。さらには、それぞれの担当授業の内容が重複してしまうことについての共通理解（それぞれの伝え方や切り口が違うのであるから、あまり気にしなくて構わない）や、各教科に求められる最低限の到達度（知識・技術など）についても意見交換する場となった。そのような意味においては、この「学びのマップ」作成のプロセスそのものが、結果として、学科内でのFD活動としてこの上ない成果をもたらすものとなった。

学びのマップ作成は、

- a. 学生が現在学習している内容について、それがどのような分野であるのか、また、学習プロセスのどのあたりに位置づけられるものであるのかが全体との関連において容易に理解していくことが可能になること
- b. 非常勤講師にも配布し、それぞれの担当科目の位置づけやプロセスを理解していただけること
- c. 学内教員で共有することで、関連する授業の連携・調整などを行うことができること

などの効果を生んでいる。特に、学内教員だけでなく、非常勤講師を巻き込み、学科全体の学習内容を共有するとともに各種の調整を図ることができる点については、「学外」へのFD活動という意味合いからも特筆すべきことだと考えている。

その後、平成20年度になり、平成21年度より資格取得にかかる科目が変更になることをうけ、「学びのマップ」を改訂した。すでに「学びのマップ」という共通のフォーマットを作り、それを元に教員が情報の共有を図るなどのプロセスを重ねている。今後は、それらの情報の共有や調整などがより具体的な形の成果（資格取得の科目だけにとらわれるのではなく、本学や学科の特性をより活かしたカリキュラムの構築や国家試験対策など）として結実させていくことが求められる。

2. 学科長所感

社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士と4つの国家資格を取得できる人間福祉学科は、カリキュラム上、多くの科目が、指定された科目となっている。学生は、これらの科目を断片的に受けとめるのではなく、科目間の関連、発展の中での現在の科目内容を位置づけ、理解していく必要がある。

「学びのマップ」を作成後、関連、発展を意識した授業内容となり、可能な限り、具体的な他の科目名を挙げ、その内容に触れながら授業を進めていった。学生の授業コメントの中にも「〇〇の授業で学んだことがこれにつながっている。」と言ったものが見られるようになり、各教員の取り組みの成果があったと思われる。

さらに、平成21年度は、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士の養成カリキュラムが改訂された。新カリキュラムの内容は、単に科目名の変更ではなく、内容の再編成が行われている。これまで、本学科で取り組んできた「学びのマップ」を用いた授業改善の取り組みは、この再編成に十分対応できるものであったと思われる。平成21年度は、再編成の内容を検討し、新たに加えられた内容と旧カリキュラムの内容を関連させていく取り組みが求められている。（木村敦子）

（報告者：溝渕 淳）

D. 心理学科 FD 活動報告

1. 「臨床心理学Ⅰ・Ⅱ」におけるFD活動

心理学科 1 年生の必修科目「臨床心理学 I・II」は、前期及び後期を通して週 1 回開講された。前期の「臨床心理学 I」で、臨床心理学では、臨床心理学とはなにか、心に寄り添うとはいかなることかを学び、心の支援の専門家である心理臨床家の仕事への理解と、イメージ形成をめざした。後期の本授業では、5 つの心理臨床事例を詳しく読み込むことで、臨床心理面接の中で進行していることや、セラピストは何をなし、その結果クライアントにどのような変化が生じるかについて、知的に理解するだけでなく、実感をもって体験的に理解することを目指した。

2. 授業について

授業形態：講義

担当：心理学科 1 年次生

担当：中丸澄子

開講時期：前期・後期（月）

3. シラバス

a. 授業目標・概要

本授業は前期の「臨床心理学 I」から後期の「臨床心理学 II」を統合したものとして、次の 5 つの目標を掲げ、①～⑤を前期で、⑥を後期の授業目標とした。すなわち、

- 1) 実践の学としての臨床心理学、科学としての臨床心理学のイメージをつかみ、周辺諸科学との共通点と相違点を理解する
- 2) 欧米及び日本の臨床心理学の歴史を通して、わが国における臨床心理学の現状と問題点を理解する
- 3) 心の専門家としての心理臨床家の仕事の内容、働く場について理解する
- 4) 援助の構造・枠組みという言葉を理解し、なぜ必要かをつかむ
- 5) 心を健康に保つための重要な概念である適応と適応機制について知識を深め、心を病むとはどういうことか、また、代表的な心の障害について正しく理解を得る
- 6) 幼児、児童、思春期、青年期、成人の心理臨床事例報告を丁寧に読み込むことで、心理療法とカウンセリングのイメージを形成し、それぞれのライフステージの心性を理解し、その実際を知性と情操の両方でつかみとる

b. 授業の計画（前期分のみ掲示）

- 第 1 回 オリエンテーション : 臨床心理学とは、心理臨床の仕事、心理臨床家が働く場、心の専門家になるために
- 第 2 回 臨床心理学の位置づけ : 科学、心理学における臨床心理学の位置づけ、周辺領域
- 第 3 回 こころとは? : 心の構造、心の機能
- 第 4 回 意識と無意識 (1) : 無意識の発見、意識と無意識の機能、自我と防衛
- 第 5 回 意識と無意識 (2) : 自我と防衛
- 第 6 回 心理臨床の対象 (1) : 心の問題とその分類
- 第 7 回 心理臨床の対象 (2) : 神経症レベルの反応 その 1

- 第 8 回 心理臨床の対象 (3) : 神経症レベルの反応 その 2
- 第 9 回 心理臨床の対象 (4) : 神経症レベルの反応 その 3
- 第 10 回 心理臨床の対象 (5) : 精神病レベルの反応 その 1
- 第 11 回 心理臨床の対象 (6) : 精神病レベルの反応 その 2
- 第 12 回 心理臨床の対象 (7) : 精神病レベルの反応 その 3
- 第 13 回 心理臨床の対象 (8) : 人格と人格障害 その 1
- 第 14 回 心理臨床の対象 (9) : 人格と人格障害 その 2
- 第 15 回 心理臨床の対象 (9) : 人格と人格障害 その 3
- 第 16 回 前期テスト

c. 授業の現状

授業の終わりには、毎回、感想と質問事項を書かせ、次回の授業開始時に感想の紹介、質問への回答時間を設けた。これによって、授業への理解度を深め、またその進捗をチェックしながら、次の授業へと繋げていった。また教材として使用した事例は、あらかじめ夏休みの課題として、学生一人ひとりに心理臨床に関する一事例を読ませ、その概要と感想をレポートとして提出を求めた。その上で、事例ごとに各自の感想文を紹介させ、質疑討論を行った。しかし、事例の中に現れる専門用語については、その都度、説明を加えたが、正確な理解に至らないものもあった。

d. 教員の振り返り

本授業は、心の援助専門家になる夢をもって本学に入学してきた学生が初めて触れる専門科目の一つであり、心理臨床家に関するイメージ形成に大きく関わるという意味で非常に重要な授業であると認識している。毎回、授業の感想と質問事項を書かせ、次の授業開始時に感想を紹介し、質問への回答時間を設けたことは、学生一人ひとりの理解度の確認や授業への関心を促進するための一つの方法である。質問が多いときには 30 分以上をついやすこともあり、シラバスどおりの授業進行にはならなかったこともあった。また、事例を読ませ、その概要と感想をレポートにし、発表・紹介させ、討論できたことは、自分と他者の考え方、感じ方の共通点や相違点を知ること、また教員と学生、さらには学生同士でのコミュニケーションをはれた点、有意義であった。しかし、非常に興味をもち、よく質問する学生がいる一方で、はじめに抱いていた臨床心理学のイメージとのズレから戸惑う学生も少なからずいた。このような学生の温度差をどう克服していくか、今後の課題である。学生への丁寧なかわりが必要になるだろう。

e. 学科長所感

心理臨床家を目指して入学してきた学生が多い状況下で、「臨床心理学 I・II」は、心理学 1 年次の重要な授業科目の一つでもある。担当教員はそれを自覚し、1 回ごとの授業終了時に感想や質問事項を書かせる方式によって、一人ひとりの学生の理解度を確認しながら次のステップに移行し、かつ、質問に対しても丁寧な解説をおこなうなど、きめ細かな指導を実施している。このような実践は今後、学科全体としても共有化していく必要があるよう

に思われる。また、本授業の後期には、一人ひとりの学生に心理臨床に関連する事例を与え、それをレポートとしてまとめ、発表・討論する形式の授業を展開しているが、これによって知的理解のみならず実感をもって、セラピストは何をなし、そしてクライアントはどのような変化を生じるのかについて、体験的に理解できることを目指している。このような実践は他の授業、とくに、少人数での授業形式では、大いに参考となりうる実践的授業モデルでもある。(松本一弥)

(報告者：中丸澄子)

E. 人間栄養学科 FD 活動報告

1. 講義内容に関連した新聞記事を取りあげ、教科書以外の日本語表現とそれに関する世の中の動きを紹介した。
2. ある教員は、単元終了後、次回まで復習しておくように伝えて、次回の授業開始時に練習問題を実施し、解答用紙回収後に解説を行った(3回実施)。また、より理解を深めてもらえるように参考資料としてプリントを作成した。今後は、3回にわたる練習問題の得点率の平均が50%未満であったこと、また、単元により得点率に差がみられたことをうけ、得点率の低い単元については、まとめの時間に、再度練習問題を実施する予定である。
3. 演習科目(臨床栄養学実習Ⅱ)においては、グループ学習に積極的に参加しない学生への対応策として、まず個人で演習を実施し、その学習結果をもとにグループ学習へとつなげる方法へと改善した。その際、個人の演習結果を発表・評価することにより、グループ学習へのモチベーションを高めることができた。今後の目標として、講義方式の授業への学生サイドからの要望を調査し、知識詰め込み型に偏らない授業方法に取り組みたい。
4. 国試対策講座等のアンケートで、「公衆衛生学」の中の疫学が苦手という意見が結構あったので、本年度は、2年生の「公衆衛生学」の疫学分野の授業時間を増やし、少し速度を落とすとした。そして、前期の試験で計算問題などを出し、理解度を評価した。昨年と前期の試験とは問題も違い、昨年の試験の答えは解説をして学生に返しているため、今年のものとは比較できないが、前期の試験を行った感触としては、本年度の取り組みがそれほど効果があったとは思えないというのが結論である。授業をどのように学生の自己学習につなげ、理解度を増していくか、あるいは、現実的にはなかなか難しいものの、もっと時間を取って少人数でやっていくような方法をとる必要があるのではと考える。次年度への課題としたい。
5. 小テスト及びアンケートを実施し、講義内容に対する学生の理解度及び要望を把握するようにつとめた。たとえば、「食品学総論」では、講義内容の理解度を高めるために中間テストを実施している。その他、多くの講義、実験及び実習の中で、管理栄養士国家試験(過去問)を解くようにしている。今後は、アンケート結果を講義内容及び配布資料に反映さ

せるようにつとめたり、全ての講義・実習・実験で中間テストを実施したりする予定である。

6. 学科長所感

平成 20 年度は、教員個々が担当授業の工夫改善を行った。本稿ではその代表的な 5 名の取り組みを挙げた。現在残っている課題は、学科全体としての FD 活動の取り組みがなされていないことである。平成 21 年度は、その一つの取り組みとして、教員全員に国家試験問題の出題形式で学期末試験問題の作成を課し、それを回覧すること等により全教員の教育力を高めていくような、新たな FD 活動を展開する予定である。

(報告者：黒川知則)

F. 総合教育研究センターFD 活動報告（「人間科学入門」）

1. 現在の「人間科学入門」発足までの経緯

平成 3 年 2 月に出された大学審議会の答申『大学教育の改善について』を受けて、大学設置基準が同年 6 月に改正され（施行は平成 3 年 7 月）、一般教育と専門教育の区分、一般教育内の科目区分「一般（人文・社会・自然）」、「外国語」、「保健体育」が廃止された。これにより、各大学は 4 年間の学部教育を自由に編成できるようになったが、その一方で、教育研究活動について、大学が自らにおいて点検及び評価を行うことが求められた。特に、一般教育と専門教育の区分廃止のもたらした影響は大きく、一般教育課程ないし教養部の改組・解体が多くで大学で進行した。結果、設置基準大綱化の 5 年後には国立大学の教養部・一般教育課程はほぼ姿を消した。

本学も平成 18 年に教養教育検討委員会を発足させ、この流れに対応した。また、本学の教養教育検討委員会が発足され、人間科学研究所主催の科目であった「人間科学入門」を教養教育科目の人間学系科目とした。委員会では、本授業を教養科目とすること、また、次の 2 点を科目のねらいとすることを確認した。

○本学の入学生に、アカデミックな学び方を教授すること

○その学生たちに「他者への理解」「創造する喜び」「発見の感動」を体験してもらうこと

2. 準備

本授業の開設準備は、平成 18 年度前期に本学の教養教育検討委員会・人間学基礎教育部会で始まった。その後何度も検討を重ね、授業内容及び授業運営方法を以下の通り定めた。

a. テーマは「近代」とすること

b. 文学、芸術、自然科学、社会学などの分野から、4 名の講師を選定するとともに、講師の任期を 3 年とすること（人間言語学科 藤本幸伸、総合教育研究センター 豊後宏記、心理学科 福田雄一、初等教育学科 佐伯育郎、人間栄養学科 小田典子、事務支援として総合支援課）

c. 「近代」をコーディネーターの講師が概説し、4 名の講師がそれを受け考察し、分担して講義内容を作成すること（左ページに講義内容、右ページにノート。平成 20 年度版では

レポート用紙も付した) →図 1: テキスト表紙参照

d. 授業アンケートによって、授業内容や運営方法を振り返ること

3. 授業運営

a. 各講師が3回もしくは4回の連続講義をした。その際に、それぞれの講師は、先行する講師の授業に参加することを原則とし、その講義を継続する形で自身の講義を行った。→図 2~4 授業風景 1・2・3 参照

b. 平成 20 年度プログラム

- 1) オリエンテーション (藤本・小西)
- 2) 『もののけ姫の世界』——アタカって誰 (豊後)
- 3) 障害について考える (福田)
- 4) What's Art? What's Design?—In & Out (佐伯)
- 5) 生命の誕生とそれに関連する諸問題 (小田)
- 6) 振り返りと授業評価アンケート (藤本)

4. スケジュール

運営委員は以下の手順で「人間科学入門」を運営・実施した。

平成 20 年 3 月: 2007 年度を個々に振り返り、内容や授業方法を模索、学生サポートセンターに大講義室の機器の改善を要求

4 月: 2008 年度の内容や授業方法 (案) の検討・共有 (1)

5 月: 2008 年度の内容や授業方法 (案) の検討・共有 (2)

6 月: テキスト原稿の執筆

7 月: テキスト原稿の提出

8 月: テキスト編集や体裁の決定

9 月: テキスト印刷と授業開始

5 名の講師による授業

平成 21 年 1 月: 授業アンケート実施

3 月: 振り返り

5. オープンキャンパス (平成 20 年 8 月 17 日) での体験授業

『2009 学びの手引き』に紹介され (→図 5: 学びの手引き参照)、オープンキャンパスにおいて「大学での学びを体験しよう～『人間科学入門』から学ぶこと」として、人間科学入門の模擬授業 (40 分) を高校生や保護者に体験してもらったところ、好評であった。模擬授業の参加者には、大学で学ぶということの実際を感じてもらえたのではないかと考える。

6. 授業評価アンケートの実施 (平成 21 年 1 月)

本年 1 月に昨年同様授業アンケートを実施した。ユニバーサルパスポートでのアンケートであり、86.3%の回答率であった。なお、本科目においては、独自の質問項目を設定している。以下の通り、①~⑩が授業共通した質問と教員ごとの質問⑪~22、(省略) 及び自由記

述（省略）となっている。

- ① 教員の説明は理解しやすかったか
- ② 授業のねらい教員間でつながりがあったか
- ③ 教室の設備や環境はどうか
- ④ ヴィジュアル装置の使用は効果的だったか
- ⑤ 興味や関心が持てたか
- ⑥ 学ぶ楽しさを実感できたか
- ⑦ さらに学ぶ意欲が出てきたか
- ⑧ ものの見方や考え方に変化が出てきたか
- ⑨ 感動や驚きなど体験できたか
- ⑩ 大学らしい授業だと感じたか

7. アンケート結果の考察

アンケート結果（授業評価アンケート結果データ→資料 1 参照）から、以下の点について確認することができた。

- a. 授業のねらいは昨年同様に達成できたこと
- b. 授業に対する満足度が維持できたこと
- c. 学生の自主学習意欲が向上したこと
- d. 授業の運営方法に検討や工夫が必要なこと
- e. 設備や環境が改善されたこと

昨年のアンケートをうけて改善・向上した部分がアンケート結果にあらわれていることが判る。教員ごとのアンケート結果からも、各講師が授業運営や授業内容を深化させていることが窺える。また、自由記述でも数多くの好意的な評価が得られた。授業運営や内容において担当者が相互に点検・評価・検討し、新たなシステムを構築したことで、「人間科学入門」は内容・形式ともにより深化したものになった。

8. センター長所感

平成 21 年度開始に向けた「スタンダード 21」という教養教育改革をうけて、本講義の運営部署が総合教育研究センターの人間科学教育研究施設から、新たに作られる教養教育部へと移ることになった。今後、本授業の準備及び運営は教養教育部によって行われる。

これまで、主として人間科学部における学問研究の入門として実施されてきた本授業は、次年度より、大学での学びに関するオリエンテーション並びに学問研究の基礎的学びという位置づけで、1 年次前期に新たに開講される「文教学入門」という科目と連動し、学問的に今一步踏み込んだ内容の講義へと進化させていく予定である。これまで担当委員が地道な活動を通して積み上げてきた実績を踏まえて、本授業の今後のさらなる充実を期待したい。（小西忠男）

（報告者：小西弘信）

図1 テキスト表紙



図2：授業風景1



図3：授業風景2



図4：授業風景3

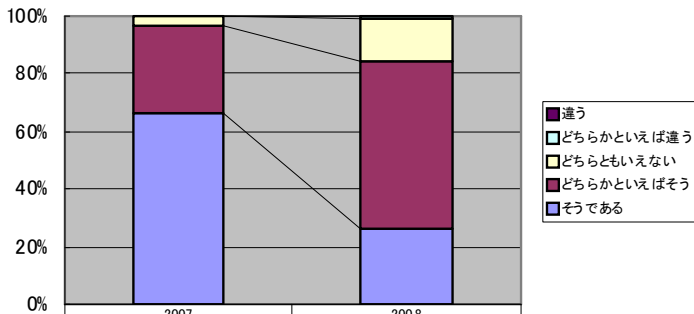


図5：学びの手引き



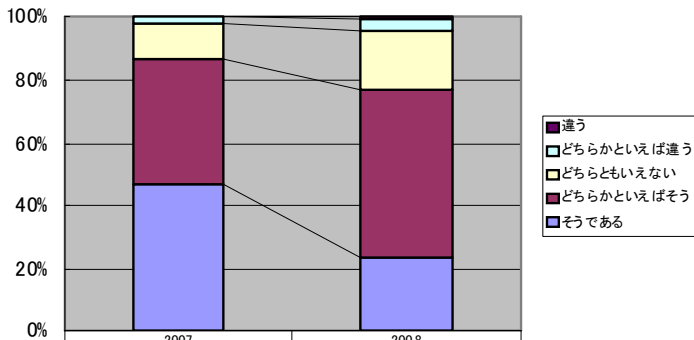
資料 1 授業評価アンケート結果データ

1 担当教員の説明には、理解しやすくするための工夫が感じられましたか



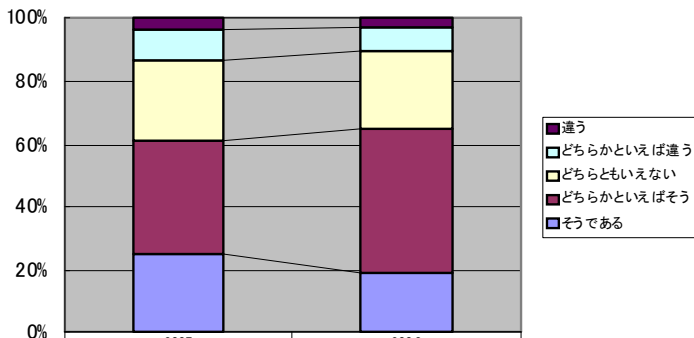
	2007	2008
違う	0	0.0
どちらかといえば違う	0	1.4
どちらともいえない	3.1	14.0
どちらかといえばそう	30.4	58.4
そうである	66.5	26.2

2 担当教員の間で、授業のねらいにつながりや配慮が感じられましたか



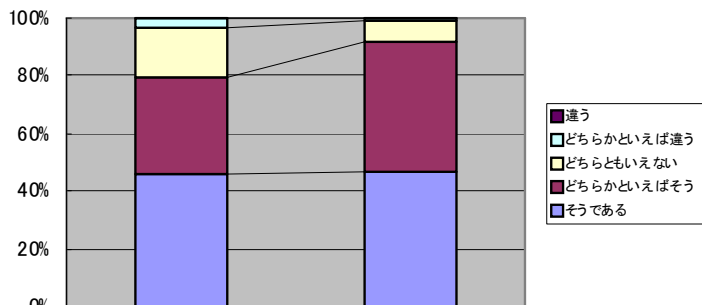
	2007	2008
違う	0	0.5
どちらかといえば違う	1.6	4.1
どちらともいえない	11.7	18.6
どちらかといえばそう	39.7	53.8
そうである	47.1	23.1

3 教室の設備や環境は、授業を受ける上で十分なものでしたか



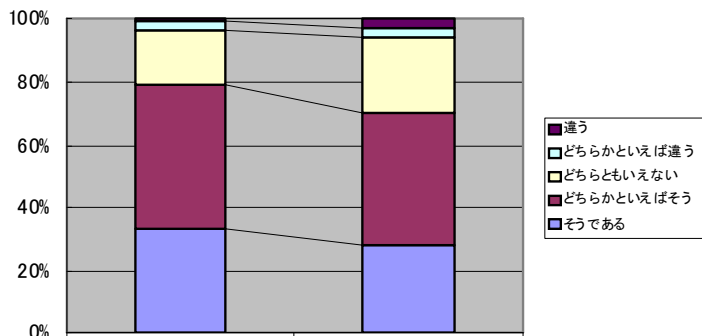
	2007	2008
違う	3.9	2.7
どちらかといえば違う	9.3	7.7
どちらともいえない	25.3	24.9
どちらかといえばそう	36.2	46.2
そうである	24.9	18.6

4 担当教員は、ビデオやプロジェクターなどの装置を効果的に使っていましたか



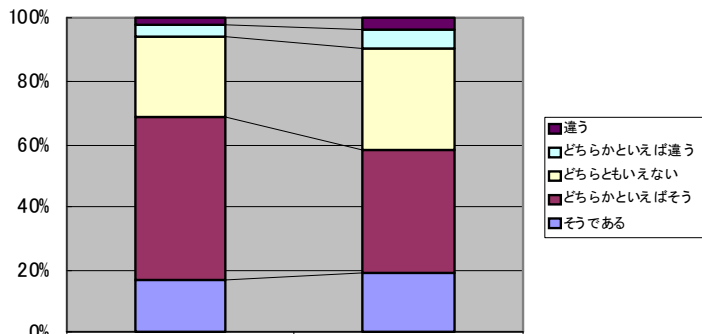
	2007	2008
違う	0.4	0.5
どちらかといえば違う	2.7	0.9
どちらともいえない	17.5	7.2
どちらかといえばそう	33.1	44.8
そうである	45.9	46.6

5 この授業は、あなたの興味や関心をかきたててくれるものでしたか



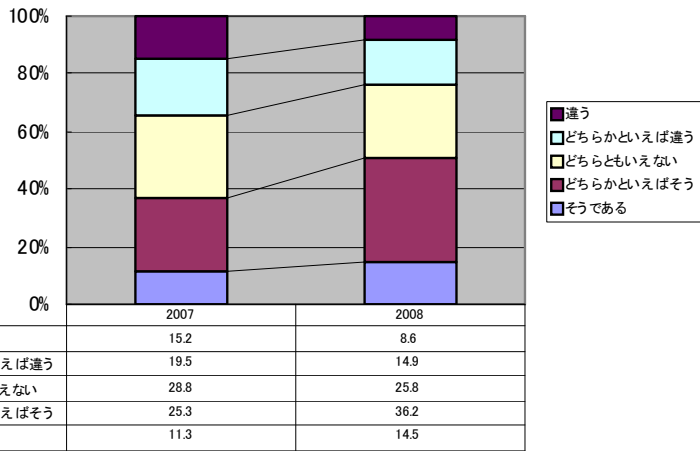
	2007	2008
違う	0.4	2.7
どちらかといえば違う	3.1	3.2
どちらともいえない	17.5	2.4
どちらかといえばそう	45.9	42.1
そうである	33.1	28.1

6 この授業を通して、「学ぶことは楽しい」と実感できましたか



	2007	2008
違う	1.9	3.2
どちらかといえば違う	3.9	6.3
どちらともいえない	25.3	32.6
どちらかといえばそう	51.8	38.9
そうである	16.7	19.0

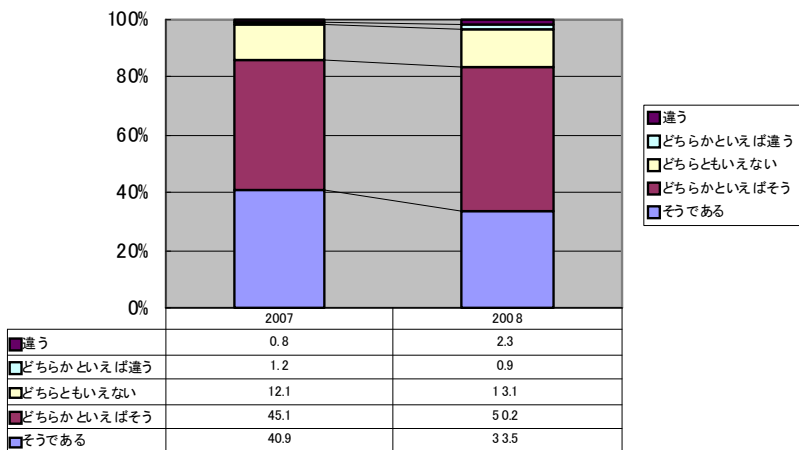
7 この授業をきっかけとして、授業でとりあげたテーマについて
自分なりに何か調べたり、人と話をしたりしましたか



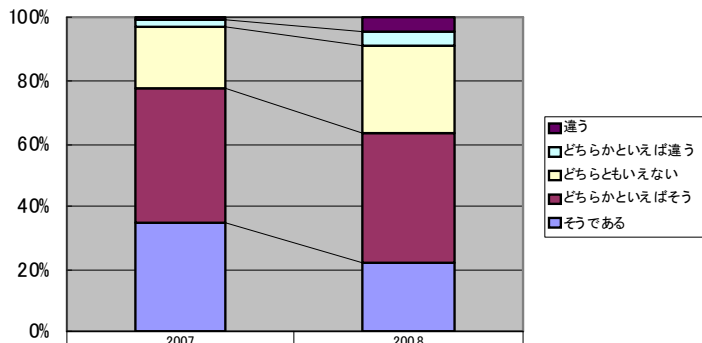
8 この授業を通して、ものの見方や考え方に変化がありましたか



9 この授業には、感動や驚きなど、強く印象に残った体験がありましたか



10 この授業は、大学らしい授業だと感じられましたか



	2007	2008
違う	0.8	4.1
どちらかといえば違う	1.9	4.5
どちらともいえない	19.5	28.1
どちらかといえばそう	43.2	41.6
そうである	34.6	21.7